



戦時中の印刷事情を回顧

『印刷界激動の時代と私の印刷人生』

史談会開催日

昭和 57 年 (1982 年) 6 月 29 日

■ 語る人

大熊 整 氏
(株)大熊精美堂

印刷図書館（大橋貞雄理事長）に本紙が協賛し、印刷業界の先達、長老から昔日の印刷業界の足跡など聞く会「印刷史談会」が年に数回開かれているが、去る 6 月 29 日、東京・文京の株式会社大熊精美堂の創始者、大熊整氏（84 歳）を迎え、話を聞いた。演題は「印刷界激動の時代を回顧」で、大熊氏とは古いつき合いで戦前から戦中、戦後と共に激動の時代を歩いて来た業界の重鎮、佐久間長吉郎氏（89 歳、元大日本印刷社長）が“助太刀役”として同席、市村道徳氏（同美印刷社長）の進行で会は進められた。大熊氏は、大正 11 年に現在の共同印刷の前身である精美堂（大正 14 年、精美堂と博文館印刷所が合併して「共同印刷株式会社」が発足）に営業員として入社、5 年間勤め、29 歳の昭和 2 年、「合資会社整美堂」を創業した。戦争中は佐久間氏のすすめと関東軍の要請により、家族、社員共々満州に渡り、奉天（現在の瀋陽）で印刷工場を操業、そして敗戦での引揚げ、帰国後の印刷工場再建——など、今まで、あまり公表されなかったその当時のいろいろなエピソードが語られ、出席者も混じえての思い出話に花が咲いた。また、大熊氏は 5 年前に『大熊整美堂とともに五十年』という社史・伝記を書いている。ここに大熊氏の“史談”を紹介、ご味読いただきたい。

＝編集部＝

(1) 印刷界激動の時代と私の印刷人生

子供の時から働きづめの生活でした。小学校4年生で酒屋の小僧に行きました

私は、明治31年に生まれ、9人兄弟の男の3番目でした。家が非常に貧乏で、小学校4年の1学期で学校をやめさせられ、酒屋の小僧に行きました。

朝早くから夜遅くまでの働きづめの生活でしたから、当然住込奉公で、まる3年務めました。

その当時は、それこそ素足に草鞋で、自転車も、御主人以外は乗れない時代でした。行った先が子福者なものですから、朝起きるとご飯を炊き、家の中の掃除をすませ、主人一家の食事のあとに食事をし、それから午前中一杯御用聞きに回る。午後からその配達、それをすませてからは子守りや洗濯、そして晩の飯炊き。夕食を終わると店番、店の掃除、閉店の手伝いがその頃の毎日でした。

酒屋での小僧生活では、先の見込みがないと思っていたところ、ちょうど姉の婿さんが、芝浦製作所に勤めていましたもので、この人の世話で、14歳の時に芝浦製作所に給仕として入社することになりました。

そして、お勤めするには、やはり勉強しなくてはならないということで、東京市立芝工業補習夜学校の普通科に入学し、補習で1年、あと電気科で2年間勉強しました。それで、卒業しましたが、それだけでは資格がとれないので、大手町にあった東京工学校の電気科に入学し、1年間勉強して卒業し、芝浦製作所の準社員になり、それから1年して漸く正社員になりました。

(2) 21歳のとき兄の石版屋を手伝う

その当時、兄が東洋印刷におりまして、石版印刷をやっておりました。その兄が独立して、父が建てた家を2階建にして工場にし、「栄文堂」という石版印刷屋を始めました。ところが、私が20歳の時に父が中風で61歳で亡くなりまして、兄が私に石版印刷を手伝え

ということで、芝浦製作所をまる3年勤めてやめ、21歳の時に栄文堂を手伝うことになりました。

私は、今までの仕事柄のせいか、工場に大きな机を持ち込んで、「こういう刷版屋には、こんなものはいらぬ」と兄に怒られました。そして、石研ぎをやったり紙を運んだり、お得意さんに品物を運んだり、3年間いるうちに、やっぱり兄弟というのは上手くいかないとわかり、ちょうど大正11年の4月か5月に精美堂（現在の共同印刷）の募集がありましたので、そっちに移ろうと決めたわけです。当時、東洋印刷の書記長をしていた人が兄の友だちで、その人をお願いし面接に出かけたんです。

(3) 大正11年、精美堂（現共同印刷）に入社

精美堂の大橋光吉社長（故人）は、機械が大好きで、当時、ちょうど鉄筋コンクリートの3階建ての新工場が完成し、そこへ半裁の機械を1ダースずらっと並べた。しかし、その頃は不景気で、何も仕事がない。

そんな状況の中で、私は面接に行ったわけなのですが、現在の共同製本の金子洋二さんの実のお父さんの君島さんという方が、常務で工務部長をしていて、その君島さんにお目にかかったところ、「月給はいくら欲しいか」と言われ、あの当時、50円、60円というの良いほうだったが、私も吹っ掛けて、「私は、80円いただければ一生懸命やります」と答えて帰ってきた。

半月ほど経っても通知がない。「これは駄目だ」と思っていたところ「6月15日から入社するように」と通知が届いた。月給は、希望通り80円だった。

これは、それこそ1～2年経ってから、君島さんに聞いたのだが「今まで、給料はいくらでもよいという人ばかりだったが、月給の希望額を堂々と答えたのは君だけだったよ。だから仕事をするだろうと思ってきてもらった」ということだった。



(4) 関東大震災は精美堂の大きな転期でした 小学館の学年別雑誌の創刊に出会う

精美堂（現在の共同印刷）に入社して、私は石版の校正刷りのところにいたものですから、精美堂に入社したものの、何が何だかわけがわからない。A全だとかB全とか、半截物の仕事をしていたのに、私は大きなことをほら吹いて入ったのはいいけれども仕事はちっとも出来ない。それでも一生懸命に勉強して、漸く少し仕事を覚えた。

その当時、共同印刷はそれこそ四六全判までも昔の石版で刷っており、それに半截もあった。

今の小学館の先代社長で亡くなった相賀武夫社長が、大阪のある会社の主任で東京にきていた。その当時、ポケット講談社の原田さんという人が、よくやってきて「こんど相賀さんが商売を始める」と言う。で、ポケット講談社の紹介で、中井さん、松本さんと3人で訪ねて行った。

そして、相賀さんが考えついたのが『小学五年生』『小学六年生』という学年別の雑誌でした。私もその企画に加わって、印刷についての助言をしたりした。

当時、精美堂の社長は仕事欲の深い方で、4色の輪転機を入れたり、グラビア印刷機もドイツから入れたが、半年以上もかかってようやく刷ったといった状況だった。

(5) 関東大震災と共同印刷設立

その頃、王子製紙がグラビアの輪転の紙をこしらえようということで、日本で初めて作ったという状態だった。それが、ほとんどがみんな破れてしまって使い物にならない。それをいろいろ研究して使えるようになった。

また、もうひとつ今の加工製紙の紙も私どもで使ったときも、アート紙がいくら研究しても駄目だった。それでも使えるように改良したものです。



そして、大正 14 年に精美堂は博文館印刷所と合併し、共同印刷になりました。

その間、大正 12 年に関東大震災がありました。私はちょうど神保町にある 10 銭ストアにいて、そこで仕事がなくどっちに行こうかと考えていた時にゴォーと、ものすごい揺れが、12 時頃きて、これはどっちにしる帰らなくちゃいけないと思い、とにかく会社へ向かった。途中、三崎町と水道橋の間は、ほとんど木造でつぶれてしまっていた。精美堂はほとんど被害を受けていなかったが博文館のほうは一部が倒壊していた。

ところが震災は会社にとって思いがけないものとなった。精美堂だけしか残らなかったため、仕事が忙しくなった。凸版印刷がやられ、大日本印刷は無事だったが、あまり石版はやっていなかったの、仕事が精美堂に来たわけです。関東大震災は精美堂にとっても一つの転期でしたね。

(6) 震災特需とストライキ

私は今まで「主婦の友」へ随分通ったが、絶対に相手にしてくれなかった。それが「主婦の友」の社長自らが、原画とお金をもってきて、仕事を依頼してきたくらいだった。その後、凸版印刷が復興して、また移ってしまったが……。

はがきの注文がものすごかった。そのため遊んでいた 12 台の半截の機械が昼夜稼動しっぱなしという状態だった。震災特需で儲けに儲けて、私たちにも特別賞与が出ましたが、その額に不服で割増しをしてもらいました。

もうひとつの出来事として、共同印刷が発足したばかりの大正 15 年の 1 月に、労働争議が起こりました。南という人物が大橋さんの家に爆弾をしかけた、という事件がありました。

大正時代の後半は、労働運動も活発になり、あちこちでストライキが行われた。印刷業界でも、秀英舎、三秀舎、三省堂、築地活版などにストライキがあった。博文館印刷所でも HP クラブという労働組合が出来て、ストまでは至りませんでした。全工員が賃上げ



その他の要求を掲げてサボタージュに入るといった事件が起きました。たしか、震災の翌年の大正13年頃と思います。

(7) 桜田鍛冶町に家を借りて「整美堂」の看板 不況下に57日間続いた労働争議

一方、景気は震災景気の反動で、極端な沈滞期を迎えていた。震災景気は、焼失した家具、什器などの需要が急に増えたことから起こったもので、これらは耐久消費財ですから、一巡してしまえば需要は止まってしまう。また活字や伝票、帳簿などにしても、一度補充してしまえば需要が緩慢になるのは当たり前だったのです。

共同印刷も、鉄工、鋳造、貯品の3部門を設けて印刷機械の製造、活字の鋳造、活版材料の製造などをやっていましたが、これらの3部門がまず景気の反動に見舞われて、生産過剰になりました。

そこで、大正15年1月8日、操業短縮を発表したところ、組合側はこれを不満として1月19日に工場を閉鎖して臨時休業を発表、次いで21日、全職工2千2百名のうち関東出版労働組合に属する1,800名に対して解雇通告をし、25日に賃金を支払い、来社しない者に対しては書留郵便で賃金を送付し、解雇手当も価格表記郵便で送付されたのです。

これに対し、組合側では、工場への通路の要所要所にピケを張って工員たちの出勤を阻止しました。

この争議では、私たち営業や事務関係者は会社側について、1週間以上も会社に籠城しました。組合側には、水野さんや中村榊さんがいました。

こうし2月になり、ようやく解決するというので協定の原案を見ると、会社は争議団に争議費用として13万円を支給し、そして、会社で2百名をピックアップして一定の手当をつけるという条件付で解雇するということになっていました。会社側は承知したのですが、私はそれを聞いて夜中に常務の君島さんのところへ行き、争議団を解散しないことには会社側の全面敗北であり、白紙に戻すよう申し入れた。そして重役会議の結果、この協定を白紙に戻すということに決定したのです。



このような曲折を経て争議は大詰を迎え、発生以来 57 日目の 3 月 18 日、王子製紙社長藤原銀次郎、ダイヤモンド社長石山賢吉両氏の斡旋でようやく解決しました。

調印は丸の内の工業倶楽部で行われ、協定書には「3 月 19 日を以って争議を休止し争議団を解散すること」の一条が明記されました。

昭和 2 年、29 歳で独立

私は、昭和 2 年に独立しました。29 歳でした。

私は、まず誠文堂新光社社長の小川菊松さんと小学館社長の相賀武夫さんに相談しました。そして仕事の発注を約束していただき、資金の一部を貸していただきました。私はあの当時、退職金として 7 百円をもらいました。

そして、常務の君島さんと、上司である営業部長の佐藤さんに相談しました。ふたりとも快く独立を認めてくださったうえ、印刷機は君島さんの口添えで浜田印刷機に入れてもらいました。

初めて工場を持ったのは、桜田鍛冶町でした。通りに面した 30 坪ばかりの家を借りて、「合資会社整美堂」の看板を掲げました。私が仕事を始める前に、小学館の相賀社長が、君島さんと佐藤さん、それに私の 3 人を上野の不忍池の「瓢亭」に呼んで、「大熊君が独立することになったので、今まで共同印刷にやってもらっていた仕事の一部をそちらに回すから、了承してほしい」と、了承を求めてくださった。

(8) 不渡り、そして火災と危機に直面

ところが、昭和 7 年 6 月、創業 5 年目にして危機に立たされてしまった。得意先の倒産で不渡り手形が出てしまい、最大の債権者である浜田印刷機に対する債務の支払いが出来なくなってしまったのです。浜田印刷機からトラックがきて、印刷機を持って行こうとしたのです。しかし、私の兄が頑張りまして、機械を渡さなかった。そして、そのまま無事にどうにかこうにか操業を続けることが出来ました。



しかし、昭和12年、今度は従業員のたばこの火の不始末から火災を出し、工場を全焼するという災難に見舞われました。創立満10周年を迎え、どうか回りにご迷惑をかけないで済むようになった時だっただけに、これにはガックリきました。

火災のあった日、浅草へ買い物に出かけていまして、私は普段、外出先から会社へ電話をかけるようなことはないのですが、ふと気になって会社に電話をかけたのですが、いくらかけても通じない。それで、隣の断裁屋さんに電話をかけてみたところが、これも通じない。「これは何かあったんだろう」と思い、帰ったところ家が丸焼けだった。12月の暮れでした。

それで、当時プロセス製版をやっていた吉田一三さんの紹介で、今の小石川の表通りの3階建の建物を見つけてもらいました。言い値は1万円でしたが、私は8という数字が好きだから、9,800円にまけてもらいまして、支払いの時に、お礼に200円を添えて払いました。

次の日、改めて現場へ行って建物を見たところ、あまりの汚さにびっくりしてしまいました。そのままではとても使い物にならないので、早速大工に来てもらって、2月11日の紀元節には、準備を整え、従業員全員と明治神宮にお参りに行きたいので、それまでに仕事が始められるようにしてくれと頼み込みました。

その時、小森善七さんに大変お世話になりました。印刷機6台を全部修理してもらいまして、昭和13年2月11日に操業を再開したのです。

(9) 組合役員の若返りに私も入れられました

火災から再建、すぐ組合の理事に

私は、火災のあと再建した新工場に移って間もなく、印刷組合の小石川支部の幹事の1人に選ばれました。しかし、14人もいた幹事の1人ですから、ほとんど名目だけ、といったようなものでした。

東京印刷工業組合が出来たのは、昭和7年の10月でした。組合は、料金の協定、設備制限、資材の共同購入というような面で統制力をもってはいましたが、それはどこまでも自主的なもので、国の要請

といった類いのものではありませんでした。

ところが、経済新体制確立要綱の決定で、こんどは国の方針として、あらゆる業界に工業組合を設立させ、資材はすべて工業組合を通じてのみ配給するという事になったのです。それで東京印刷工業組合も時勢に即応した形に改めることが必要になってきました。

そこで、昭和 16 年の 3 月、組合結成以来の指導者だった井上源之丞さん、大橋光吉さん、青木弘さんらが役員を辞任し、代わって大日本印刷から佐久間長吉郎さん、凸版印刷から山田三郎太さん、共同印刷からは大橋松雄さん、そのほか 12 人が新理事に推薦されたのですが、それまで全然関係のなかった私が、突然呼び出されて理事の末席に加えられてしまいました。

(10) 佐久間、山田、大橋の若手三羽ガラス

私が一生忘れないのが、井上さんと青木さん、大橋さんらが日本橋の亀清に呼んでくださり、「あとを頼むからよろしく」とご馳走してくれたことです。昔の人はそれだけ礼儀作法がありました。私は死ぬまで忘れません。

当時、佐久間さん、山田さん、大橋松雄さんらは若手の三羽ガラスと呼ばれていました。この時、佐久間さんが 48 歳、山田さんが 39 歳、大橋松雄さんが 37 歳で、私が 43 歳でした。

この役員人事の刷新は、日本経済の戦時体制化を推進するための一環として、印刷団体にも全国 1 本の統制機関の確立が急がれていたときで、その伏線として行われていたものでした。印刷業界は、今まで全国組織を持たなかったのでなんとか全国組織を作ろうと佐久間さん、山田さん、大橋さんの 3 人が全国を遊説して回ったのです。

そうしてその年の 10 月、全国的な統制団体として「日本印刷文化協会」が発足しました。しかし、成立後、間もなく大橋松雄さんが亡くなられてしまったのです。残念でした。

昭和 18 年暮れになって、佐久間さんから私に、満州へ行って印刷をやらないかという話がありました。



(11) 昭和 19 年、家族 3 人で満州にわたる

この頃になると、内地から満州への物質の輸送もだんだんと困難になりつつありましたので、現地で自給自足する態勢の方針がとられていました。そのためいろいろな業種が内地から満州に進出していましたが、印刷もそのうちのひとつとして凸版印刷、共同印刷を始め、いくつかの会社が現地に工場を持ち、多くの印刷人が活躍していました。

その中のひとつに、主として関東軍の仕事をしていた「興亜印刷」という会社があり、佐久間さんはその社長を兼務していました。軍から印刷工場をさらに強化するよう要請され、興亜印刷は、内地から印刷工場を移転させようという方針で、佐久間さんを通じて適当な人物はいないかと捜していたのです。

佐久間さんは「どうしても行ってくれ」と言うし、家では、絶対に行かないと反対するし……。それで、私は誠文堂の小川さんのところへ相談に行きました。そして小川さんに、「骨はおれが拾ってやるから、行ってこい」と言われて、満州へ渡る決心ができました。家に帰り、家族を説得し、家族 3 人で渡りました。

渡満する前に、私の工場は全部整理し、活版機、平版機、写真製版設備、植字の機械などを送りました。4月に積み出しを終わったので、大熊整美堂を解散し、50人ほどを満州に連れて行きました。昭和 19 年のことでした。

私はもう事業はやらないつもりで、平版機 3 台を、私の今の娘婿の親に私の兄と頼んで、そこに「大熊整美堂」の名前を残して満州に出発したのです。

(12) ひとつひとつの情景が走馬灯のように去来します 自分から働こうという人は少なくて

私としては、印刷業をやる気はあまりありませんでしたが、興亜印刷の常務として渡満したわけです。しかし雇われ根性の人ばかりで自分から働こうという気持ちの人間がないことに、いささか

驚きました。

満州・奉天の新工場は興亜印刷の1工場として、鉄西地区532部隊の中で操業を始めました。私は興亜印刷の常務取締役としてこの工場の管理を任せられ、部隊の構内の木造5百坪の建物を施設するように言われました。

部隊の中で始めたわけですが、この時期が冬であり、極寒のこの地方では何もかもが凍ってしまって土をも掘れない状態でした。春になるのを待って、漸く4月になって印刷機も2台か3台が稼動出来るようになり、工場の態勢が一通り整ったところで、私は昭和20年の4月に、資材の手配や仕事の連絡のために日本へ帰り、7月15日に満州に戻りました。

昭和21年7月5日東京に戻ってきた。そして、8月15日に終戦を迎えました。何をどうしたらよいか軍からも会社からも指示はありませんでした。私は、まず工場の整理をしなければと思い、急いで工場に戻り、刷りかけていた軍の勅語の刷本を穴を掘って全部埋めました。

このときは男の工員のほとんどが召集されていて、女と子供ばかりの22人を引き取り、どうにかしなければならなかった。それで食べていくために、屋台の食べ物屋をやることにした。おでん屋としなそば屋とコーヒー屋と汁粉屋の屋台を4店出しました。

日本に帰るまでに無事にいたいという一心で、近所の人は笑っていましたが、お米や野菜、コーリャンを買って普段から貯蔵していました。食糧も節約し、そして4つの屋台を出して給料を払って働いてもらった。お客さんは、向こうの人が多かった。

何とか切り抜けて、終戦からやがて1年になろうという昭和21年6月19日、北奉天駅から帰国の途についた。北奉天から錦州を経てコロ島に着き、ここからリバティ船で日本に向かい、7月3日に佐世保に上陸し、5日に東京の品川に着きました。



(13) 小川さんが家まで用意してくれてた

着いたところが、物資も何もなくて、大日本印刷に電話して車を

向けてもらい、そして誠文堂の小川さんのところに送ってもらいました。

小川さんには連絡済で、骨を拾ってくれる約束だったから、池袋に私が住む家まで用意しておいてくれました。そして、お米から味噌、雑巾、帚に至るまで揃えておいてくれました。

(14) 戦後は健保組合で骨を折りましたね

戦後、業界の活動として一番骨を折ったのが健保でした。白井倉之助さんと唐沢泰宏さんの2人が非常に骨を折ってくれました。全国を飛び回って、健保の問題について働いてくれました。

新村さんや向喜久雄さんと共に東京都に働きかけて昭和25年に許可になりました。しかし、5,000人の組合員が必要でしたが、2,500人しか集まらず、それで人数を誤魔化したりしたものですよ。

一つ一つの情景が走馬灯のように私の胸に浮んでは消えます。お陰さまで、私の会社も今年の7月21日に満55年を迎えます。

